

## 未来への扉 - 若者に寄り添う NPO のチャレンジ

## 第2部

# シェルターを拠点にした伴走支援



児童養護施設やファミリーホーム、里親等で育った方の多くは、18歳で施設を出ます。施設などを出た後、寮付きの仕事に就いている場合はとくに、本人の体調不良や事業所の経営不振等で仕事を続けられなくなったときにたちまち住む場所に困ってしまいます。彼らには頼れる実家がないため、受け皿を作ることが課題となってきました。

「生活が不安定で継続的な養育を必要とする」児童に対しては20歳まで措置延長することができ（児童福祉法第31条第2項）、厚生労働省は措置延長の積極的な活用を求めてきました。しかしながら、自立準備が整わなくても18歳で退所を迫られる方が多いのが現状です。

一方、ネグレクトなどの厳しい家庭環境にありながら社会的養護で保護されず、18歳を過ぎてから耐え兼ねて家を飛び出した若者たちは、ネットカフェや友人宅を転々としホームレス状態に陥るなど路頭に迷いがちです。犯罪に巻き込まれるリスク

も高いです。若者たちからの相談を受け、支援対応するなかで、こうした若者たちが使える社会資源が決定的に不足していること支援者たちは実感しています。これからどうやって生きていくのか、本人が考え、生活を選び取っていくプロセスに寄り添い、支援するにも、まずは住む場所を用意することが必要だとして、任意でシェルター事業を始める若者支援団体ができています。こうした支援団体の運営するシェルターに若者たちがたどり着くことで、若者の居住支援ニーズが顕在化してきています。当助成事業では、制度ではカバーできない若者たちの居住支援ニーズをとらえ、シェルターを拠点に伴走支援を行う民間団体に助成しています。第2部で紹介する6つの団体は、緊急一時的な居住ニーズへの対応のほか、1年程度入居可能なシェアハウス等の住まいを提供し、心身の回復や立ち立ちに向けた伴走支援を行っています。シェアハウス等を出たあとのアフターケアも行う団体もあります。

### 支援団体一覧（掲載順）

法人名・施設名	事業名（採択年度）	所在地 （事業実施エリア）	掲載箇所
認定 NPO 法人 こどもの里 こどもの里自立援助ホーム	社会的養護アフターケア事業 (21年度・22年度)	大阪府 (大阪市西成区とその周辺)	p23 - 26
NPO 法人とりで	退所児童等アフターケア事業 (21年度)	山口県 (山口県・広島県)	p27 - 30
NPO 法人サンカクシャ	住まいを失った若者向けのシェアハウス事業 (21年度) 住まいを失う若者の居住支援及び若者の居住 支援全国ネットワークの立ち上げ (22年度)	東京都 (豊島区・北区・板橋区)	p31 - 34
一般社団法人アマヤドリ サポート付きシェアハウス アマヤドリ	若者を社会資源に繋げるための相談・住居・見 守り支援事業 (21年度)	神奈川県 (全国)	p35 - 38
NPO 法人スマイルリング	社会的養護出身者に対する自立支援事業 (21 年度・22年度)	北海道 (北海道)	p39 - 42
NPO 法人アトピッツ地球の子ネットワーク	ケアリーパーの居場所づくりと地域への啓発 事業 (22年度)	山梨県 (山梨県)	p43 - 46

## 児童館と自立援助ホームを拠点に地域の若者・家族を応援する



## 認定 NPO 法人こどもの里

### 『こどもの里自立援助ホーム』

## 採択事業名

2021 年度

社会的養護アフターケア事業

2022 年度

社会的養護アフターケア事業

## 基本情報

 <https://www.eonet.ne.jp/~kodomonosato/>


## こどもの里 (団体情報)

住所：大阪市西成区萩之茶屋 2-3-24

TEL：06-6645-7778

MAIL：kodomo-no-sato@hera.eonet.ne.jp

## こどもの里自立援助ホーム

住所：大阪市西成区長橋 2-5-13

TEL：06-7508-1238

MAIL：kodomonosatohome@gmail.com



## 団体紹介

こどもの里は大阪市西成区釜ヶ崎で生きる子どもの権利を守ることを目的に 1977 年に設立され、子どもの最善の利益を考慮すること、子どもの自尊心を守り育てることの二つを大きな信念としています。児童館での遊び場の提供（学童保育）からスタートし、児童館に来る子どもたちとその家庭が抱える様々な問題に対応するなかで、行き場のない親や子の緊急避難場所を提供するなど、多岐にわたる支援活動に広がりました。現在は、児童館と相談支援拠点、ファミリーホームを一体化させた施設と、その近くの自立援助ホームを拠点に子ども、若者、親子を支援しています。こどもの里の日常と子どもたちの成長はドキュメンタリー映画「さとにきたらええやん」に描かれています。



Column

## 地域密着型のこどもの里

こどもの里はこどもたちの遊びと学び、そして生活の場です。学童保育に来る子どもたちに職員は遊びや会話を通してじっくりと向き合い、子どもたちが学校や家庭で経験する悲喜こもごも様々な気持ちにも寄り添い、必要な支援を行っています。

釜ヶ崎とその周辺地域には経済的に余裕がない世帯やシングルマザー、精神疾患やさまざまな困難を抱えた子育て家庭があります。その困難さが原因で落ち着いて子育てすることが難しい家庭があります。こどもたちがこどもの里に通ってくる中で、家庭内の問題が顕在化し、そこから相談につながるがあります。そこでこどもの里では地域でこどもたちの安全や安心を守るために、一時預かりや一時宿泊できるようにしています。

館長の荘保共子さんが里親として登録し、児童館に併設する形で2001年に開始した大阪市家庭養護寮では多くのこどもが育ちました。2010年にファミリーホームに移行しました。また、

児童館で育ち、大きくなった子どもたちが地域で生活できる場所が必要になるだろうとスタッフ同士が話し合いを重ね、2016年に男子の自立援助ホーム、2023年9月には女子の自立援助ホームを設立しました。

このように、こどもの里が地域の学童保育、子育て支援、年少児の社会的養護、そして高齢児の社会的養護、アフターケアまでを担うことで、子どもたちは地域の人やこどもの里の職員との関わりを軸に生きる力を育むことができるのです。これは、「自分に与えられた境遇の中で自身のもつ力を発揮、駆使してたくましく生きている素晴らしい子どもたちを、社会の偏見や蔑視から守り、彼らが自信をもって自分の人生を選び、進めるよう支援することをモットーとする」というこどもの里の信念から生まれた支援の形と言えるのではないのでしょうか。



Column

## 当助成を活用した若者への同行・訪問・食料支援

こどもの里では当助成を活用して、こどもの里で関わる子どもや若者、親に対し、措置費では十分に対応することができない相談支援や、病院や公的機関への同行支援、訪問支援の他、食糧や日用品の支援、シェルター提供、若者のピアサポート形成、家族へのソーシャルワーク、職員研修を行いました。

2022年3月～2023年2月に当事業で受けた相談は1885件を数え、同行支援は256件、訪問支援は245件あり、本人の状況を把握して、必要な支援を行いました。話をするだけの時もあれば、引っ越しの支援をする場面もありました。地域密着型のこどもの里ならではの強みを生かした支援をすることができましたが、同行、訪問支援は職員の時間と労力がかかるため、人員体制の課題が見えてきました。翌年度は求人に苦労しましたが、職員を増やして取り組んでいます。

特に困窮している若者には、「実家的存在のスタッフ（社会）が見守っているよ」というメッセージが伝わるよう、食糧や最低限度の生活必需品を訪問時に手渡しするなどし、上記期間中に計403件提供しました。物資支援は直接的で、若者たちにとっても喜ばれる活動ですが、際限なく支援するのではなく、個々の生活状況などを考慮して行うことが肝要だとこども里では考えているそうです。



Column

## 簡易ホテルを利用したのシェルター提供

家庭の事情で家を失う若者たちがいます。そんな若者たちに対するシェルターの提供は「“だれもが安心して安全に生活できる場所がある”という人間の当たり前の権利を保障するとても重要な活動」です。ほとんどの若者が機能不全に陥った家庭で育っています。そんな若者たちの緊急一時宿泊所として簡易ホテル（ビジネスマンや旅行者などが滞在する安宿）の1室を提供しています。2022年3月から11カ月間に5名が計62泊利用しました。翌年度（2023.4-2024.2）は若年女性3名、115泊の利用がありました。簡易ホテルのオーナーの理解、協力もあり、必要な人がいたときだけ空き室を借りるこの方法は、アパートを継続的に借り上げるよりも安く、機動的で良い方法でした。



Column

## ピアサポートの関係性を育む「本気で食べて語ろう会」

若者たちが社会に出て自分の力で生きていくには、こどもの里の職員との関係性の強化だけでなく、仲間との絆を深め、互いの境遇や想いに共感し、ピアサポートする関係性を築くことが大事であると考え、「本気で食べて語ろう会」を毎月行っています。男女別に集まって夕食の後にテーマにそって本気で語り合うというものです。COVID-19等の影響で何度か中止になりましたが、男子は自立援助ホームに、女子は近くのステップハウスに集まって開催しました。



Column

## 当事者中心の家族応援会議

親も子どももそれぞれに問題を抱え、苦しい状態になってしまっている多問題家族、機能不全家庭への支援として、こどもの里では家族のニーズに沿って家族とスタッフや関係者が集まって、家族応援会議を開いています。ラップアラウンドの考え方を取り入れ、支援者が主導するのではなく、当事者を“主人公”にして、可能な場合、ピアサポーターとして親視点の支援者、子ども視点の支援者が入って、これからの生活をどのようにしていくのかをいっしょに考え、可能なサポートを行っています。

このような高度なソーシャルワークスキルが求められる家族応援会議のみならず、児童館や自立援助ホームでの日々の支援においても、職員のコミュニケーションスキルなどの研鑽が欠かせないため、こどもの里では定期的に専門家の意見を聞きつつ、職員間でケース会議をしているほか、活動時や研修時に職員間でフィードバックをし、より質の高い活動を目指しています。



Interview

## 取り組みのなかで大事にしていること

植月健司さん：

支援者と当事者という立場の違いはありますが、「お互い同じ人間や」という意識で活動しています。当事者が“嫌がる”のは「やってあげている」「やってもらっている」という態度・言動です。そうではなく同じ地域、社会で生活する者同士、当然の人として当たり前の権利を保障し、社会の一員としてできることをやるだけです。まずは本人の意思や希望を聞くこと。例えば、アフターケアとして食料支援をしていますが相手の希望を聞き取りつつ提供しています。救ってやろうとか奉仕しようとかあまり思っていません。できることは少ないけれど、困っていて弱い立場であるのが理解できたら同じ人間としてできることをやるだけです。フラットな関係を大事にしています。それは自分の家族に対しても同じかなと思います。以前、こどもの里で1年間、ホロコーストでなくなったポーランド人ヤニシュ・コルチャックさんという「子どもの権利条約の父」と言われる方の勉強をしました。コルチャックさんのことばで「子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間である」という言葉が、私の心にあります。



Interview

## 支援が生かされたと感じるとき

植月健司さん：

成人式があって、20歳の子が4人くらいきて、「育ててくれてありがとう」と言われ、大きくなったなあ、小さい頃から見えてよかったな、小さいころあんなことあったな、と親みたいな感じで、思いました。いわば子育てをいっぱいしているような感じで、感慨深くなります。いいことも悪いこともあります。自分の家族だけでなく、色々な子どもたちと関わって、見守ることができる、それがこの仕事の醍醐味です。こどもには親戚のおじさんくらいに考えとけよ、と言っていて、そういう存在、お互いに言いたいこと言い合える身内のような存在がいいと思っています。親にはなれないですが、身内に恵まれなかった子が多いから、そんな感じで接しています。



Interview

## 助成金があったからこそできたこと

植月健司さん：

お金を使えることで、会いに行ったり、食糧支援や訪問した時に一緒に食事したりすることの頻度が増えましたが、それをきっかけにアフターケアをもっと意識することができるようになったことが大きいです。今まではボランティア意識が強かったのですが、アフターケアを記録するようになり、時間や回数とともに、その内容も書いていたりするので、支援の内容の質の振り返りができるようになり、他の人の記録を共有して、チームとしてアフターケアの活動を充実させていけるようになりました。今までは個人的に支援していたことが、社会のお金である休眠預金の活用によって、「社会的に擁護していくことは必要なことなんだ、“社会の問題”なんだ」となり、ひいてはいろんな方々が気づききっかけになり、世間の意識が変わっていくのではないかと思います。

### 担当者インタビュー

## 若者支援に関わることになったきっかけ・動機



植月 健司さん

認定 NPO 法人こどもの里

20年くらい前、30歳頃、「何かが違う」と思い脱サラして、何をやろうと悩んだあげく、直感的に子ども・若者関係の仕事をしたいと決意し、ボランティアで西成の学童保育、「山王子どもセンター」に通い始めました。その近くにあったのが「こどもの里」で、初めて里に行ったとき、子どもたちが1階ホールで思いっきりボール遊びをしていて、全力で当たってきたり、背中に乗ってきたり、人見知りの壁がなくやっていることも言っていることもはちゃめちゃで、オープンで、何事も全部出して、それがおもしろく、1年ほどボランティアとして関わることになりました。後にスタッフとなり、本格的に子どもたちと関わる中で、ある子どもたちが若者になったときに大変になるだろうとスタッフ間で話し合いを重ね、若者の生活の場になる自立援助ホームを始めました。それから、自立援助ホームを担当しています。



入江 真友さん

認定 NPO 法人こどもの里

両親が里親をしていて社会的養護の子とともに生活してきました。そのなかで里子が里親の元から児相の措置変更で切られることが度々あり、子どもながらに傷つき連絡も取れない里子の傷つきやその後のことを思い、不安になっていました。こどもの里のことを知った時、館長の講演の動画を観て、家を離れなければならない子が一時保護や児相に行かず、地域で生活続けることができるという話を聞き、衝撃を受けました。本当にそんなことができるのか？という関心をもったことが、こどもの里に入職したきっかけです。こどもの里では、子どもが地域やそれまでの関係から切り離されずに生活続けられるよう、子どもにも大人にもやさしい場所であろうとしているのではと思います。

## 退所児童等アフターケア事務所の1室をシェルターにした再出発支援



## NPO 法人とりで

## 採択事業名

2021年度

退所児童等アフターケア事業

## 基本情報

 山口県岩国市南岩国町 5-19-12

 0827-35-6509

 toride@toride2016.com

 <https://www.toride2016.com/>


## 団体紹介

とりでは「地域が子育てを支える」を理念に、山口県岩国市を拠点に子どもの貧困対策・子どもの居場所づくり・保護者への子育て支援の活動を行いながら、子ども虐待の予防と保護を目指しています。主な活動の対象者は、地域の子どもとその保護者（子育て家庭）と児童養護施設等を退所した児童です。活動を通して対象者とかかわりを持ち、その中でも支援が必要と思われる人には、関係機関と連携しながら当法人が運営する様々な事業につなげ、継続的な支援を行っています。虐待を受けた子どもたちの保護の受け入れ先としての自立援助ホーム、ファミリーホーム、一時保護専用施設、退所児童等アフターケア事業のほか、地域の家庭への養育支援として、とりでこども食堂、とりで塾、とりでモーニングや放課後等デイサービス、ショートステイにも取り組んでいます。



Column

## アフターケア事業所めぐり・まつり・こたつ

とりでは2016年に女子の自立援助ホーム（そなえ）を開設し、事業をスタートしました。その後、男子の自立援助ホーム（ゆめじ）、ファミリーホーム（のぞみ、いちご）を開設してきましたが、これらの施設を退所した若者たちに対して個別に相談にのり、継続的な関わりをしていくことが必要になり、法人の任意事業として2020年に退所児童等アフターケア事業を開始しました。現在は他法人の施設を出た方も受け入れています。

現在3カ所あるとりでのアフターケア事務所（めぐり、まつり、こたつ）は、3DKくらいのアパートを活用した支援拠点で、個別相談に応じるほか、外出や行事、フットサル等のスポーツイベントを定期的に行うなど、若者たちが集まるグループワークを行っています。相談支援は、電話や直接面談して行うほか、本人の状況によっては来所させて食事支援をしたり、各種手続きや通院などの同行支援も行っています。こうした取り組みを通じて、若者と支援スタッフが継続的な関わりをもてるようにしています。一時的に住む場所がなくなった退所児童等に対してはアフターケア事業所の一室を貸し、生活が安定するまで生活支援を行っています。さらに、地域の企業と連携協定を結んで若者を受け入れてもらう形で、就労支援を行っています。



Column

## シェルターでの生活トレーニング

助成期間中（2021年3月～2023年2月）にめぐり、まつり、こたつにて生活した若者は計11人（のべ14人）で、のべ利用日数は1930日となりました。のべ利用人数は当初想定より少なかったものの、入居期間は前年度に比べて長期にわたる人が多い結果となりました。

入居者は事務所で提供する食材を使って自炊したり、ごみの処理、掃除、洗濯など、自分の生活を整える練習をし、職員は度々訪問し、生活の立て直しの相談にのるなどしました。ファミリーホーム退所と同時にシェルターに移った若者は、生活の中で自発的に自炊をしたり、就職活動ができるようになり、「ここにきて良かった。ホームでは甘えてしまい、働いたり、料理をしたりする気になれなかった」と話していました。



Column

## 就労支援の新たな試み

助成事業期間中、事務所のシェルター利用を経て、就労・一人暮らし等によって事務所を退居したのは1人とどまりました。その背景として、仕事が続かず就労自立が難しい若者が増えたためではないかととりでは考えています。そもそも連携協定企業は建設業が多いため、その他の業種を希望して特別な配慮のない企業に入ったため、就労継続できなかった人が多かったようです。

一方で、連携協定を結ぶ企業での就労受け入れと、とりでスタッフによる就労後のフォローが功を奏してこれまでになく就労継続できている若者もなかにはいます。そのうちの一人は通信制高校に通っており、2023年の春、無事に卒業できました。「今後はこどもにかかわる仕事に就きたい」と意欲をもっているそうです。

また、就労支援の新たな試みとして、企業（飲食店）に相談し、とりでの職員が若者に付き添って一緒に店でアルバイトをする同行出勤モデルが1社でき、それまでになく就労を続けられたケースがありました。これは非常にユニークな試みです。



Column

## 若者たちをつなぐグループワーク

近くのスポーツ施設を優先的に借りることができ、スポーツイベントや食事会で他者とつながる機会をつくりました。いろいろな場を企画したことで、若者たちは自分が楽しめそうなイベントを選んで参加できたようです。こうしたつながりから友人関係が広がり、休みの日に誘い合って遊びに行った話も聞かれるようになりました。一方で、COVID-19の影響を心配し、人が集まる場所には行きたくないという人もおり、長期にわたる感染症の影響に悩まされることもありました。



Column

## 利用者アンケートの結果

とりでは、2023年1月に利用者45人（18～30歳）に対してアンケートを行い、20人から回答を得ました。

「とりでの活動に参加してよかったものは？」への回答で多かったのは、「バスケやフットサルなどのスポーツイベント」40%、「食事会」25%、「とりで職員との個別のかかわり」25%でした。

「とりでと関わることで良いと思うことは？」への回答で多かったのは、「気軽に話せる（相談できる）」55%、「仲間に会える」30%、「仕事に関して手助けしてくれる」10%でした。

困ったことがあった時に「相談する人」として、「とりでの人」と答えたのは「友人」と並んで25%でした。



Interview

## 取り組みのなかで大事にしていること

家庭以外の場所が必要と判断されて入居してくる子ばかりなので、しっかり居場所を提供することが僕らの使命ですから、どんな子でも選ばずに受け入れられるためにホームの質を向上することは大事にしています。受け入れてからも問題行動を起こしたりとか、難しい状況になる子どもはいますが、安心できる場所にするには、どんなことがあっても見捨てないということをしっかりやっていくことだと思います。家庭で傷ついた子どもを、もう1回こちらが見捨ててしまうと、2重の傷になり、その後のその子の人生に大きく影響を及ぼしますから。見捨てないということを信念として、持ち続け、がむしゃらにやることを忘れないようにしたいと思います。それと、子どもたちがホームから出た後もいつでも連絡しやすい雰囲気を作っておきたいので、見守ってくれた大人が変わらず、働いて居続ける場所にするために、経営面と意思の両立は最初からブレずにやってきました。また、人材育成では悩んで考えて動く、実践を大切にしています。



Interview

## 支援が生かされたと感じるとき

「来たくて来たわけじゃない」って、若者のお決まりのセリフなのですが、ここに来てよかったとか、ここに来て変わったとか、それを自分から言えるようになったらすごいなと思います。なかなか言いませんけど。気づけていない子もいるので、ここが変わったよなんて伝えることも大事にしています。環境が変わったら、本当に劇的に変わります。学校に行っていなかった子が、わざわざ学校へ入り直したりとか、仕事も全然できなかった子がフルタイムで働けるようになったりとか、友達ができて遊びに行くようになったりとか、すごい過去をもっている子が多いのですが、回復していく。そういう姿が自分たちの励みにもなっていて、自分たちも頑張らなきゃなと思いますし、刺激ももらえています。





Interview

## 助成金があったからこそできたこと

施設を巣立った若者のなかで、仕事を辞めて住まいがなくなった子をアフターケアの拠点で一時的に受け入れ、訪問したスタッフが個別に相談に乗ったり、ハローワークや法人とつながりのある企業への同行など、生活全般の伴走と共に家賃だけでなく、食材費などの消耗品費、そして人件費もまかなうことができました。来る前は、食事など用意してくれる、とりでの法人のファミリーホームにいた子が多く、アフターケアの拠点で自炊するようになった子や仕事を1か月以上続けられるようになった子もいます。ファミリーホームや自立援助ホームにいる子は、「親を頼れないし、他に選択肢がないから入居させられた」という意識が強いのですが、アフターケアは見相など第三者が入らず、若者とスタッフの間だけで話すことができ、自分で決めた感が強くなり、スタッフへの反発がなくなりました。また、拠点では知り合いもいないので法人のレクとか地域の塾や食堂に参加したり繋がりができて、生活の充実感を得て、それが仕事を頑張る意欲にもつながっていると思います。そのような変化を生み出す場所を創って、運営が続けられたということが大きな成果です。

### 担当者インタビュー

## 若者支援に関わることになったきっかけ・動機

**金本 秀韓さん**

NPO 法人とりで事務局



社会福祉士の資格を取るために実習をした児童養護施設で、子どもたちの親代わりするのが楽しかった経験があり、大学卒業後、そこに就職しました。50～60人が住んでいる「大舎制」の大きい施設で、荒れている子どもが多く大変でしたが、2～3年すると子どもたちが落ち着いてきて、その後は自立するために施設ルールを守らせることに必死でした。でも、大人しい子ほど退所後に困難を抱えてしまい、やんちゃな子ほどしっかり生きている状況で、ルールを守らせるより自分たちで考えさせる方が大事だということになり、どうやってルールをなくせるか、施設で議論したものの折り合いがつかなくなりました。本当にやりたいことは、自立のために必要なケアをすることだったので、8年目に自分でやったほうがいいと思い、2年準備をした後、県と相談して、NPO 設立と同時に山口県になかった女の子向け自立援助ホームを立ち上げました。

### NPO 法人とりで 活動内容

1. 児童自立生活援助事業（自立援助ホーム：2カ所）
2. 一時保護専用施設（1カ所）
3. 障害児通所支援事業（放課後等デイサービス：1カ所）
4. 子育て短期支援事業・夜間養育事業
5. 退所児童等アフターケア事業（3事務所）
6. 子どもの貧困対策に関する事業（とりでこども食堂、とりでモーニング、とりで塾、とりでこども宅食）
7. 保護者からの子育て相談

## 住まいを失った若者たちが「生きる」ことにしっかり向き合う居住支援



## NPO 法人サンカクシャ

## 採択事業名

2021 年度

住まいを失った若者向けのシェアハウス事業

2022 年度

住まいを失う若者の居住支援及び若者の居住支援全国ネットワークの立ち上げ

## 基本情報

東京都豊島区上池袋 4-35-12 3 階

03-6905-8287

<https://www.sankakusha.or.jp/contact/>
<https://www.sankakusha.or.jp>


## 団体紹介

サンカクシャは15歳から25歳くらいまでの親を頼れない若者たちがどんな道に進んでも生き抜いていけるように、「生きていくための基盤」となる「安心できる居場所」「住まい」「社会に出て働くためのサポート」の3つの支援に取り組んでいます。東京都豊島区、北区エリアで、地域の方や企業の方と連携し、若者たちが安心できる場で大人と関わる経験を積み、頼れる先とつながりを持ち、社会に出て働く自信をつけられるよう、若者のための居場所「サンカクキチ」、シェアハウス「サンカクハウス」、一人暮らし型「サンカクシェルター」を運営しているほか、仕事探しの伴走も行っています。



Column

## シェルターだけでなく居場所も活用した伴走支援

サンカクシャでは、若者の住まいとしてシェアハウスと個室のシェルターを運営しています。シェアハウスは2024年1月現在4か所（当助成で運営しているのは1か所）あり、当該シェアハウスの入居定員は4人、月5万円前後で入居できます。スタッフと入居者でご飯をつくり、食べる機会や個別面談などを実施しながら、1年～1年半程度で一人暮らしができるまでの生活の再建を目指しています。相談に応じながら生活環境を整え、必要に応じて制度利用などにつなげ、自力で家を借りて生活できるようになるまで伴走します。

一方、一人暮らし型シェルターは共同生活が苦手な若者向けの短期のシェルターと位置づけ、2024年1月現在7室（当助成金で運営しているのは2室）提供しています。初めて一人暮らしにチャレンジする若者には、洗濯機の使い方やゴミ出しのスケジュールなどを一緒に確認するところから始まり、度々訪問して生活サポートをする他、定期的に面談をします。すぐに就労が難しい方は生活保護を利用してアパートに転居できるよう支援しています。シェルター卒業後も、生活が安定するまで伴走支援をしています。



Column

## <伴走支援＋居住支援＋就労支援>のパッケージ

「サンカクハウス」、「サンカクシェルター」は若者のための居場所「サンカクキチ」にアクセスしやすい場所にあります。自分が住む場所以外にも日中過ごせる居場所があり、いろいろな人や面白いことに出会うことができます。そのような環境を提供することで、若者たちの生活世界が少しずつ広がります。サンカクシャの支援の特徴は、①スタッフがひとり一人に丁寧にに関わり、伴走支援を行うこと、②若者たちの状況に合わせて様々なプログラムを創出・運営すること、③協力企業を開拓し就労支援を行うこと。そしてこれらを連動させながら支援を行っていることと言えるでしょう。なお、当助成事業では居住支援用の物件確保と入居者への伴走支援、居住支援団体の全国ネットワーク形成とアンケート調査、若者居住支援に関する政策提言に助成金を活用しています。



上中里での料理の様子



入居中の若者が仕事をしている様子



Column

## 入居相談

サンカクシャには、所持金がないけど入居したい、緊急で泊まる場所がないなど、若者たちから直接相談が来ることが多くあります。親と同居しているものの COVID-19 や物価高の影響により家族との関係が悪化し、「家にいたくない」「家を追い出される」若者が増えるなか、サンカクシャは SNS や YouTube、オンラインゲームなどでアウトリーチを行い、居住支援を必要とする若者と出会うことができました。また、公的機関や民間の支援団体など連携先からの紹介で入居にいたる若者もいます。

オンラインゲーム空間でのアウトリーチは代表の荒井佑介さんならではの非常にユニークな試みでした。荒井さんによると、若者たちにとって、公的な相談機関はどんな人に話すことになるのか分からず怖いのに対し、若者自身に馴染みがあるゲームの世界を知っている人の方が相談しやすいのだと言います。若者の目線や感覚に寄り添った斬新な支援アプローチができるのは、若い支援スタッフが多いサンカクシャの強みと言えるでしょう。一方で、ネット空間の顔の見えない人から示される支援情報は必ずしも安全ではなく、若者たちは犯罪や貧困ビジネスに巻き込まれやすいハイリスクな状況にあります。実際に、貧困ビジネスの劣悪な環境のシェアハウスからサンカクシャに逃げてくる若者たちもいます。

また、若者たちが身を寄せられる場所を用意しているサンカクシャは、公的機関からも頼られる存在になっています。生活保護ケースワーカーのほか、こども若者総合相談センター、子ども家庭センター、教育相談担当課などから支援対象の若者の受け入れ依頼があります。若者向けの公的な居住支援リソースがなく、NPO 独自のシェルターが受け皿となっている状況です。今後、公的な財政措置も求められます。



Column

## 若者居住支援団体の全国ネットワークの立ち上げ

居住支援を必要とする若者の多くは、家庭での虐待、社会的養護を経験しているなど、困難な環境で育っています。そのため、若者の居住支援の現場は、若者とスタッフのコミュニケーション、若者間のトラブルなど様々な難しさに直面します。若者たちの生活の立て直しにはシェルターの提供だけでなく、しっかりとした伴走支援が必要ですが、その財源は年度ごとの助成金頼みであるなど、課題が多くあります。そこで、サンカクシャでは、若者への居住支援を行う団体の情報を集め、2022年11月に初めて全国交流会を企画し、経験交流を行いました。支援者としての苦労や痛みがあるなかでも楽しく、信念をもって取り組んでいる仲間と共感できる場づくりが大事だという想いから、2023年度は全国ネットワークの立ち上げを目標に、交流会を年2回開催しました。また、若者居住支援のニーズと支援現場の実情を明らかにする必要があるとして、アンケート調査を行い、2024年1月には調査報告会を開催しました。この調査結果などを用いて、今後、若者の現状や課題を社会に発信し、公的支援の拡充を国や自治体に働きかけていく予定です。



Interview

## 取り組みのなかで大事にしていること

相談が苦手、人が苦手という若者が多いので、支援者という感じではなく、適切に若者を受け止めつつ友達のようにフランクに、気楽に話せるような関係性構築を一番大事にしています。さらに、居場所ではフランクな距離感が大切ですが、居住支援では、フランクさに加えて本人が抱えている課題に向き合うことや、生活、仕事においてしっかり自立をサポートすることも必要です。ここで初めて「支援」的な関わりが必要となります。居場所と居住支援ではキャラクターによって担当を分け、チームで対応しています。この2つを分けて、両輪のバランスをとっていくのがサンカクシャの居住支援の特徴となっています。



Interview

## 支援が生かされたと感じるとき

私たちは福祉的、支援的な観点ではなく、一人の人間として若者と関わることをとても大事にしています。支援関係を築くことが難しく、すぐに離れていくような若者ほど、既存の制度から取りこぼされてしまいます。だからこそ、まずは相談に来てくれたことがありがたいです。居所がなく親にも頼れずに孤立している若者が、安心できる人間関係や場所を獲得していくきっかけとしてサンカクシャを使ってもらいたいと思っています。

若者たちが虐待など生い立ち故に抱えている困難と向き合い、乗り越えていくところを応援していきたいです。若者が負っている境遇は「呪い」という言葉が合っていると感じるのです。「呪い」をかけられなくてもよかったのにとおもうので。

葛藤の中で、職場の人間関係に悩みつつも働き始めていく姿を見たときは手ごたえとともに支援してよかったと感じます。



Interview

## 助成金があったからこそできたこと

ずっと定員がいっぱいだったシェアハウスを新規で構えられたことが大きく、居住支援が広がったことにより相談数が増え、命ぎりぎりにつながった子もいたり、より多くの子と繋がれました。さらに女性のシェアハウスを立ち上げたことで、男女の違いによる支援の難しさの違いも分かり、団体内でノウハウが蓄積できてきて支援体制の強化につながりました。また、行政のみならず、路上生活者支援の団体との連携がすごく増えたなど困難なケースへの対応に慣れてきて、様々なトラブルを経験しながら手ごたえも感じ、少し疲弊しつつも、和気あいあいと楽しく支援する団体のアイデンティティも確立できたと感じています。とにかくこの一年はいろんな子とつながり、スタッフも鍛えられましたし、政策提言や企業との連携の土台が確実に作れてきて相談支援だけでなく、サンカクシャ全体の支援体制もかなり整っていったことが、助成金を活用してきたことかと思います。ディープな領域を楽しそうに対応する団体として知ってもらえるようになり、自分たちにとってもアイデンティティがより明確になった気がします。

### 担当者インタビュー

## 若者支援に関わることになったきっかけ・動機

荒井 佑介さん

NPO 法人サンカクシャ代表理事



大学生の時、新宿の駅近くのビルの階段で出会ったホームレスのおじさんと毎週話すようになって、ホームレスの現状を聞くようになりました。大学も面白くなく、教員の両親にも反発していた自分にとってその人が話してくれたホームレスになった理由などの身の上話からうかがえるホームレスの現状は壮絶で面白かったのです。その後、ホームレス団体を調べ、炊き出しに行ったり、あちこちのホームレス支援団体に顔を出し、ビッグイシューでの週7無給インターンに落ち着きました。その中で、若年ホームレス、20～30代の人にも出会い、幼少期に困難があることがわかり、なぜ路上にでるのか、に興味をもつようになったタイミングで地元 埼玉の学習支援アスポートに出会い、関わるようになりました。そこでの教え子たちが、高校を中退して妊娠や出産など多岐に渡って問題を抱えてしまっているのに支援がなさすぎると感じ、サンカクシャの立ち上げにつながりました。

誰もが自分の生き方を自分で選べる世界へ



## 一般社団法人アマヤドリ

### 『サポート付きシェアハウス アマヤドリ』

#### 採択事業名

2021年度

若者を社会資源に繋げるための相談・住居・見守り支援事業

#### 基本情報

🏠 神奈川県三浦郡葉山町堀内663 かざはやファクトリー内

☎ (非公開)

✉ info@amayadori2020.com

🌐 <https://www.amayadori-official.net>



#### 団体紹介

アマヤドリは、「自分のために、自分で選ぶ」体験を大切にしながら18～29歳の若者をサポートする活動を行なっています。18歳を境に児童福祉法や児童虐待の防止等に関する法律の対象外となる中、家庭に居場所がない若者や、家庭から何らかの虐待を受けている若者が、経済的にも精神的にも自立準備期間である状態で自立を強いられ、追い詰められている状況をなんとかしたいと、元高校養護教諭の菊池さんが2020年に団体を立ち上げ、支援活動を始めました。神奈川県を拠点に、相談サポートや住居提供などを行なっています。



Column

## 若者を社会資源に繋げるための相談・住居・見守り支援

アマヤドリのサポート付きシェアハウス事業は、菊池さんが以前、養護教諭として勤務していた高校の卒業生などからの相談を受けるなか、若年女性の住み支援のニーズがあったことから始まった取り組みです。シェアハウスを立ち上げよう準備している時期に当助成と出会いました。当助成事業（2021年3月～2023年2月）では、支援を必要としている若者がアマヤドリにつながるための情報発信、若者が抱えている課題と一緒に整理し、解決に向け必要な各機関への紹介・同行・保護を行い社会資源につなげる伴走型相談、サポート付きシェアハウス事業、一人暮らしの見守り支援、講演等での社会発信を実施しました。

若者たちへの相談支援、居住支援に奔走するなか、少しずつ支援スタッフも増え、チームで支援にあたれるようになってきました。



Column

## 相談・課題整理

アマヤドリでおこなっている支援を若者たちに知ってもらえるよう、リーフレットを作成し、公的機関や高等学校の養護教諭経由で高校に設置してもらったほか、SNS発信や知人の紹介、インターネットなど、様々なルートで若者たちに向けた情報発信を行いました。相談はまず団体の相談フォームで受け付け、面談での相談につなげていくことにしました。しかし、相談フォームでの書き込みはしたもの、知らない大人と面談をして話すのに抵抗を感じた方が予想以上に多いことがわかり、どうすればハードルが下がるのか、検討するきっかけになりました。

相談につながった方のほとんどは、COVID-19の影響で経済的に困窮していました。また、18歳になるまで社会的養護の対象とはならなかった若者から寄せられた相談の半数以上は、保護者のテレワークや失職、休校・オンライン授業などにより、家族と過ごす時間が増えたことで更に関係が悪化し、家庭内での居場所を失ったというものでした。そこで、面談では一人ひとりに丁寧に話を聞き、若者が抱えている課題を相談員と一緒に整理することから始めました。何に困っているかわからない、困っていることがたくさんあって何が課題か自分ではわからなくなっている時には、一緒に課題を整理する相談が欠かせません。そのうえで支援計画を作成し、継続的なオンライン相談や対面での面談を行いました。当事業で継続的な伴走型相談支援ができたのは12人、そのうち4人はスタッフとの相談のみで課題解決にいたることができました。

課題解決のために制度等を利用する必要がある方（12人のうち7人）には支援機関を紹介したり、窓口への同行や、緊急保護をしたうえで社会資源につなげるようにしました。

すでにアパートで一人暮らしをしているものの「ゆらぎのある成長過程」にある若者たちに対しては、定期的な見守りサポートのほか、必要に応じて相談、課題整理、情報提供、他機関への付き添いなど、長期的な伴走を目指してサポートを行っています。このようにして継続的に伴走できている若者たちは少しずつでも着実に課題を解決していくことができています。



Column

## サポート付きシェアハウス

サポート付きシェアハウス「アマヤドリ」は、孤独感や居場所のなさを感じていたり、経済的に困っている18歳から20代の女性が、それぞれが望む未来に向けて、初めの一步を踏み出すサポートをするシェアハウスです。「家族と関係が良くなく、家を出たいけれど、一人暮らしのための初期費用がまだない。」「一人暮らしをしているけれど、経済的に厳しく頼れる人もいない。」という方を受け入れています。スタッフが定期的に訪問し、食事を一緒につくって食べたりするなか、ひとり一人へのサポートも行っています。入居者から緊急の相談が入った時や、連絡をとるなかで危険を察知した時には、スタッフが連絡を取り合い、対応しています。また、入居者にも上記のような継続的な伴走支援や、キャリア支援を提供し、自立に向けたサポートを行いました。当助成期間中に3人が当シェアハウスで生活し、半年から1年程度かけて自立にむけたステップを進めました。シェアハウスを出てアパートでの生活をスタートした後も、継続的に見守り、相談支援を行っています。

また、シェアハウスの定員がいっぱいになる一方で、新規相談のなかには緊急性の高い相談も多いことから、現在は、居住支援法人として県に登録し、地域のアパートを活用した居住支援も行っています。



Interview

## 取り組みのなかで大事にしていること

アマヤドリが若者と接するときに大切にしていることが3つあります。

**1つ目は、若者の「自分で選ぶ」「自分で決める」をサポートすることです。**

主役は若者本人。ご本人の意見を何より尊重し、選ぶことや決めることに伴走しています。

**2つ目は、選択肢を増やすことです。**

例えば、当団体でも住居の運営は行なっていますが、それはあくまで選択肢の一つと考え、他の団体の運営する住居、民間アパート、グループホーム、施設など、さまざまな選択肢を提案し、ご本人にとってそのとき最善の選択をするお手伝いをしています。

**3つ目は、対等であること、信頼関係を築いていくことです。**

意志をもった人間同士として、対等であることを大切にしています。そのためにはまず、私たちが信用できる大人であること、そして支援される・するの関係を越えた、信頼関係を築いていくことを目指しています。



Interview

## 支援が活かされたと感じるとき

長く関わっていく中で、最初はアマヤドリしか頼る先がなかった子が、病院の先生と話をすることができたり、関係のよくなかったお母さんと話してみたら心配してくれていることがわかったなど、アマヤドリ以外との繋がりが増えて、頼る先が増えてくると、よかったなといつも思います。本人がいるんなつながりを作れるように、面談の中で「通院してみる？」と声かけをしてみたり、一部関東近郊ではありますが、本人の希望があれば同行支援も行なっています。



Interview

## 助成金があったからこそできたこと

運営に携わる2名の方々からコメントをいただきました。

**菊池さん：**

立ち上げ間もない団体だったので、全て持ち出しや皆様からのご寄付でいただいたもので運営していました。助成をいただいたことで、支援を継続的にするための体制や、働く方の労働条件を整えたりといったことに注力することができ、団体としての基盤を整えられるようになりました。

**七尾さん：**

アマヤドリは支援の狭間にいる若者にサポートすることを大切にしています。虐待を受けていても、児童相談所につながるができなかった子もたくさんいます。そういった子と繋がることができ、相談先になれていることが、助成をもらい取り組みをしてよかったと感じることで。



## 担当者インタビュー

## 若者支援に関わることになったきっかけ・動機



菊池 操さん

一般社団法人アマヤドリ代表理事

養護教諭時代、18歳以上の卒業生からも相談を受けていました。18歳を超えると児童相談所なども対象外となり、そこに制度の狭間があると感じ、若者たちをサポートしようと、自分たちで支援を始めることにしました。「そうするしかなかった」「追い込まれて仕方なかった」という言葉をきき、誰もが自分の望んだ生き方を選ぶことができる世界をつくっていく決意をしました。



七尾 安友香さん

一般社団法人アマヤドリ相談支援員

学生時代、児童福祉を勉強していて、最初に自立援助ホームに就職しました。その経験から、もっと若者支援に関わりたいという気持ちを持ち、制度に先駆けて若者を支援をしているアマヤドリで活動を始めました。アマヤドリはスタッフがチームで活動しており、ケアをしあいながら喜びをもって若者支援に取り組んでいます。私たちがまず、お互い助け合い、大切にし合える大人であることが、若者により良い支援を届けることに繋がると感じています。

つまずいた時には支えてくれるあたたかな存在がある事を伝えたい



## NPO 法人スマイルリング

### 採択事業名

2021年度

社会的養護出身者に対する自立支援事業

2022年度

社会的養護出身者に対する自立支援事業

### 基本情報

🏠 北海道帯広市東2条南26丁目9-1

☎ (非公開)

✉ info@npo-smilering.com

🌐 <https://www.npo-smilering.com>



### 団体紹介

スマイルリングは、児童養護施設等を退園後、頼れる大人がいない若者たちや、少年院出院後、帰る場所や行き場がなく、経済的にも精神的にも孤立無縁で孤軍奮闘せねばならない若者たちに安心できる居場所を提供し、就労などの伴走支援を行い、あたたかな精神的支えとなり、「孤立しない自立」ができるようサポートを行なっています。自らも若い頃に荒れた生活を送ったという理事長の堀田さんが児童養護施設訪問ボランティア活動に参加したことをきっかけに、2004年に北海道帯広の地でスマイルリングを立ち上げ、2016年1月に法人化し、若者たちが幸福になること、若者たちがもつ未来への可能性を応援することを目指して活動しています。



Column

## シェアハウス「スマイルリングホーム」

スマイルリングでは、施設等を出たあと行き場がなく、生活に困窮し、SOSを発信する若者たちをシェアハウス「スマイルリングホーム」（男性のみ）に迎え、温かい食事や安心して眠ることのできるふとん、入浴、そしてゆっくり時間をかけた傾聴などで心身の回復を図れるようにしています。入居相談は本人や家族、あるいは児童養護施設や少年院など、全国から寄せられます。

入居者のなかには発達障害の特性やコミュニケーションが苦手など、就労や社会生活でハードルがある若者が多く、それに加えて施設出身であることへの社会からの偏見に苦しんでいる若者もいます。孤独で不安が先行する立ち立ちにならないよう、若者たちとシェアハウスでじっくり話をしながら、根気強い伴走支援を行っています。2021年度助成期間中（2022年3月～2023年2月）にのべ7人が入居しました。入居期間は1週間に満たない人もいれば、1年以上にわたる人もいます。翌年度は入居相談が多くありましたが重い精神疾患等がある方などは入居が難しく、4人をグループホームにつなぎ、継続入居している若者のなかには病院に入退院を繰り返す方もいます。

スマイルリングホームに入居している間に健康管理などの生活能力をつけられるよう、若者たちは掃除、料理、洗濯、ゴミの分別などを学び、少しずつ身につけてきました。一方で、若者たちと話すなかでしっかりした金銭管理の学びの足りなさを感じ、一人一人とじっくりマネー講座を行ったところ、生活費の想像がしやすかったようで手応えを感じることができました。スマイルリングホームでのこうした生活サポートや傾聴は主にスタッフの野々村さんが他の仕事と兼業で担っていましたが、2023年の春からはフルタイムになり、退所者支援やその他の取り組みにも力を入れています。



Column

## 支援者がともに働くことで就労継続

若者たちがスマイルリングホームで生活サポートを受けながら、日中は理事長の堀田さんの経営する建設関係の会社で堀田さんとともに働き、経験を積めるようにし、就労、生活両面の相談にのるなどして自立への準備をサポートしています。その他の会社で就労チャレンジする若者もあり、2021年度助成期間中に就労したスマイルリングホーム入居者・退所者は10人、そのうち9人が就労継続できました。若者たちをよく理解する支援者が一緒に働くことで若者たちが就労を続けられることがわかりましたが、若者一人一人の特性に合った就労先の選択肢を増やし、その継続をどうサポートしていくかが課題です。

帯広や周辺地域の企業等で若者たちの理解者が増えるよう、様々なイベントやメディアでの啓発活動も行っています。地元を中心に少人数で語り合う座談会を企画したほか、講演会やシンポジウムなどを開催し、社会的養護や少年院出身の若者たちの置かれている現状や、支援活動の実情、想いを伝えています。



Column

## ひとり立ちした若者とその家族への支援

こうしたサポートを得ながら、近くにアパートを借りてひとり立ちをした若者もいました。彼らが社会で孤立せずに自立するためには、家族のように暖かく、「見守り・つながり・支えていく」存在が必要です。近隣に住む若者たちがスマイルリングホームに食事に来たり、相談に訪れることもあり、若者たちがいつでも帰って来られる「みんなの居場所」として定着してきています。

また、2023年は結婚して子どもができた人も増えました。夫婦ともに児童養護施設出身で、どのように子どもを育てればよいのか分からず、日常生活を整えることが難しい家庭もあり、スタッフの野々村さんがそういった家庭にこまめにご飯を届けたり、掃除を手伝ったりして子育てをサポートしています。妻の愚痴につきあったり、夫（スマイルホーム出身者）の困った行動の相談を受けた時には「母の愛のムチ」でしっかり叱りつけることもあります。自治体の子育て支援機関の職員が「要支援」と判断し関わろうとするも、拒否されてしまっている家庭にも、野々村さんは入り込んで親身な伴走支援を行っています。

COVID-19の影響が大きかった時期は、こうした退所者家族から食料や日用品、衣服などの支援の要請が倍増し、持参するだけでなく、遠方の人に郵送することもありました。



Column

## 心を支える思い出づくりと社会のなかの居場所づくり

若者たちが、社会の中で孤独に苦しみながら生きるのではなく、社会の中には彼らを応援し、つまづいた時には支えてくれるあたたかな存在があることを伝えたいとスマイルリングでは考えています。そこで、成人式や誕生日などの晴れの日を祝い、振袖や羽織袴姿での記念写真を撮って思い出づくりを支援しています。また、子どもたちが施設を退所する前から関係づくりをするため、児童養護施設でのイベントや少年院での講話を行っています。COVID-19による緊急事態宣言の時期には屋内でのイベントが難しくなったことから野外イベントに切り替えました。「ミナイカシ畑」で様々な背景を持った人々とごく自然な形で交流ができる農作業やボクシングセッションなどを実施し、参加した地域の方々にも喜んでもらいました。こうした活動でのエピソードをSNSで発信しているほか、メディアに取り上げてもらうこともできました。広報が功を奏し、若者の他、親からの苦しい気持ちを打ち明けられるような相談も相次ぎ、これに対応するスタッフの増員が必要になってきています。



Interview

## 取り組みのなかで大事にしていること

青年達一人一人との絆を作り、彼らが「孤立ではない自立」を目指せるよう、伴走していく事です。私たちのところへ身を寄せる青年達の多くが、過去に壮絶な虐待を受けるなど、人を信じる事が出来なくなるほどの心に深い傷を負っている事が多いです。そんな彼らに、「何かをしてあげたから」心がつながっていく事はありません。彼らが本当に社会の中で幸福な人生を歩んでいく為には、どこまでも人間としての温かな関わりを持って接し続ける以外に、彼らとの絆を構築していく方途はないと感じています。一つ一つの事業に、どこまで私たちの心の「温かみ」を持って青年達と関わり、それを伝えていくのが大事だと思っています。



Interview

## 支援が活かされたと感じるとき

うちに来る子は不安や緊張が強く、とても疲れ切った状態で現れます。幼い時から虐待に遭い、心身ともに傷ついたり、施設や居場所を点々としていてずっと落ち着く居場所がなく、いつしか自分自身の事を諦めてしまい、考え方も行動も刹那的で、「どうせ生まれた時から終わっているんだから」という子もいます。

しかしあたたかく迎え入れて、ご飯を食べさせ、清潔な布団でゆっくり眠らせ、彼らにゆっくりと寄り添っていくと、どの子にも生きる力が湧いてくるのが目に見えて分かります。生命力が湧いてくると、就労など、自分の将来の為に必要な事に粘れるようになっていき、そのように徐々に成長していく彼らを見守れるのは、とても嬉しい事です。



Interview

## 助成金があったからこそできたこと

発達、精神、知的障害や、薬物、アルコール依存症、虐待による強いトラウマを抱え、非行歴のあるような、社会で生きていくにはあまりにも重い問題を抱えた青年達の事を、諦めず、手を離さず、じっくり一緒にいられた、ということがとても大きいです。就労がなかなか出来なくても、生活能力がなかなかつかなくても、彼らの事を一緒に見守れる連携先と繋がれたり、彼らと一緒に居ることができる方法を見つけることが出来たりと。助成金を頂いていた期間は本当に安心して、彼らの為に、思う存分活動することが出来ました。

数字にして表すことが難しく、一見、成果が無いように思われてしまうかもしれませんが、彼らの内面的な成長は目覚ましいものがあり、関わったら関わっただけ、あの子達が元気になっています。

ただ、もっともっと、時間がかかる、ということです。それもこれも、何にも分からず力の無い私たちにとてもあたたかく、親身になって寄り添ってくださったユニバーサル志縁センターの皆様のお陰だと、心から感謝しています。

## 担当者インタビュー

## 若者支援に関わることになったきっかけ・動機

堀田 豊稔さん

NPO 法人スマイルリング理事長



17歳で暴走族の総長になり、体に刺青を入れるなど荒れた青春時代を送り、少年院、刑務所にも服役しました。

20代後半、服役中に父が死に、母が病に倒れたと連絡が。自分のせいで両親や大勢の人の人生を壊してしまった事を考えると、自分の人生は害悪でしかなく、何の為に自分は生まれてきたのかと、死をも考える日々でした。

30歳を目前に出所し、結婚し、子供も生まれ、土木工事についた自分は、「これが普通の平凡で幸せな人生か」、安らかではあるものの、何かが足りないと感じる日々でした。

ある日テレビを見ていると、自分と似たような過ごし方の「刺青ボクサー」のドキュメンタリーをやっていました。「川崎タツキ」さん。薬物依存を乗り越えてプロボクサーとなり、日本タイトルを戦うまでになった人です。「すごい人だな。この人に会ってみたいな」と思いました。すると何日かして、古い知人から本当に久しぶりに電話がかかってきました。「堀ちゃん、川崎タツキって知ってる？俺の中学の時の先輩なんだ」。居ても立っても居られず、東京まで飛んで行きました。タツキさんは昔悪かったのが信じられないほど優しく、明るく楽しい人で、すっかり人柄に魅了され、「アニキ」と呼ばせてもらう事に。それから頻繁に電話で話すようになりました。「トヨ、本当に強い人間は人に優しいんだよ。俺にも、アニキさんがいるんだ。坂本のあんちゃんというんだぜ。」それは元ライト級日本チャンピオン・平成のKOキングと呼ばれたボクシング界のレジェンド、坂本博之さんでした。

坂本博之さんは児童養護施設出身で、現役時代から全国の児童養護施設に赴いては「ボクシングセッション」などをして、社会的養護の子ども達への支援をおこなっていました。「この人たちと一緒にいると、自分が変わる」そう確信し、日本全国の児童養護施設へと一緒について回るようになりました。

行く先々で、いろんな子ども達との出会いが待っていました。鹿児島島の児童養護施設に行った時のことです。皆から「あばれる君」とあだ名がついている、問題児の中学生と出会い、彼と友達になりました。北海道に帰ると、手紙が届きました。「今までこんな所に居るのは嫌だったけど、今日はここに居て良かったって、初めて思った。トヨに会えたから。ありがとう。」刑務所の中で、社会の害悪でしかないと思っていた自分に「ありがとう」と言ってくれたのです。同じような内容の手紙が、女の子からも一通届きました。涙が止まらなくなるぐらい感動して、嬉しかったです。

その後もいろんな子ども達や施設の先生達と話していると、本当に大変なのは、施設を退園した後なのだということがわかり、そんな青年達を支えたいと思って、スマイルリングを設立しました。そして自分自身が少年院にいたことから、青年達と講話や面接を続ける中で、少年院出院後に家に帰れない子や社会での生活に困難を抱えている子が大量いることなどから、少年院出院後の青年達も支援対象とすることにしました。

アレルギー疾患のケア経験豊富なスタッフがいる女性向けシェルター



NPO 法人アトピッ子地球の子ネットワーク

採択事業名

2022年度

ケアリーバーの居場所づくりと地域への啓発事業

基本情報



[山梨ランチ]

山梨県上野原市上野原 3446-7 山梨ランチ 1階

[東京事務所]

東京都新宿区西早稲田 1-9-19-207



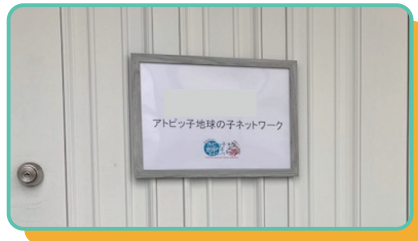
0554-21-9246



info@atopicco.org



https://www.atopicco.org



団体紹介

アトピッ子地球の子ネットワーク（以下、アトピッ子）は、アトピー性皮膚炎・食物アレルギーなどのアレルギー疾患のある人を対象に電話相談や社会調査を行い、心理的負担や疾患による生活の質の低下に直面する患者とその家族の暮らしを支援することを目的に1993年に発足しました。子どもや子育て世代の支援を通して、人と自然が共生し多様な価値を認め合い、誰もが共に生きることができる社会の実現を目指しています。近年はキャンプリーダー育成などを通してティーンエイジャーの自立・自律支援にも力を注いでおり、2021年より山梨県上野原市にてケアリーバーの女子向けのステップルームを運営しています。



Column

## 住む場所がなくなったケアリーバーや DV 被害者が入居

アトピッツとケアリーバーの出会いは、アレルギー疾患の子ども向けに実施しているキャンプに2001年から専門里親やファミリーホームの子どもたちを毎年数人招待してきたことに始まります。参加してくれた子どもたちのその後の様子を知る機会は、折に触れ作ってきました。COVID-19の影響でアルバイトの雇用止めが広がるなか、友人宅を転々とするケアリーバーがいて心配だということで、この緊急事態に対応するため、アトピッツで2021年10月に「女性ケアリーバー用ステップルーム」を開設しました。児童養護施設で措置延長を受けていたものの措置期限の20歳になったケアリーバーのほか、児童相談所からの委託で高校生を受け入れるほか、DV被害者シェルターの入居期間が満了した方、知人宅で身分証明書や通帳等を取り上げられるなどのDV被害を受けた方も受け入れています。18歳～23歳のケアリーバーの女性を主な対象とし、上野原近郊や多摩西部に通勤通学したい人、DV、雇用止め、健康問題などの困難があり、居場所がなく、支援が必要な人が自立できるまでの居場所を提供するシェルターとしました。

最寄のJR駅から徒歩20分、八王子まで1時間という立地で、居室は3部屋（個室）あり、居間、トイレ、お風呂、台所、冷蔵庫、洗濯機などを共用するシェアハウス形式です。開設から1年半で18～20歳の4人が当ステップルームを利用しました。アトピッツのスタッフ2人が管理人兼調理、メンタルサポートを担当しています。掃除・調理スタッフを募集しましたが、高齢者が多い地域でもあり、求人に応募してくれる人がなかなか現れないのが悩みです。



Column

## ステップルームでの生活

入居時には、住民票の移動、郵便物の転送、ゴミの日の確認など、諸手続きや日常に必要なことを確認します。役所等での手続きにはスタッフが同行し、必要であれば助言をして本人が手続きの主体になれるようにサポートするようにしています。入居者の出身施設の職員が同行サポートにあたってくれる時もあります。

緊急に入居する人は当面の生活に必要なものを何も持たずに身一つで来ることもあるため、寝具類、洗面道具、洗濯用ハンガー、着替えを入れる引き出し、小テーブルなどを貸し出しできるようにそろえています。また、助成金を活用してホットカーペット、電気ストーブなどの暖房器具を各部屋に設置することができました。電気代高騰のため、入居者の中には自室から出るときは上着を着込み、食事の時も台所や居間のエアコンをなるべく使わないという節約志向の人もあります。

ステップルームは自立に向けた練習の場なので自炊の練習を促しており、入居者が自分で朝・昼の食事を作れるよう、食材を台所や冷蔵庫に常備しています。月曜から金曜の夕食はスタッフが調理して提供しています。パスタを茹でてレトルトソースをかける程度の簡単なこともしたことがない人も、一緒に練習をするうちに一人でできるようになりました。経験を重ねるなかで、失敗エピソードもたくさんあります。ピーマンを種ごと炒めてしまった。レンジの中で芋が燃えた。賞味期限が来た食品を全部捨ててしまった。鍵を開けたまま外出した、など。失敗から、一人で生活していくのに必要な経験知を増やしていています。

入居者全員とスタッフが集まるミーティングを月1回行い、健康管理（服用管理も含む）やマインドマップ作り、料理など様々なテーマで話しています。個別に困っていることや不安なことを話す個人面談も月1回行っているほか、日常的にSNSを活用して、メンタルサポートスタッフにいつでも連絡したり、相談できるようにしています。夜間にオンラインで話すこともあります。



Column

## ステップルールの継続に向けて

ステップルールの経済基盤を支えるものを少しでも増やそうと、年会費1000円の若者自立支援応援サポーターを募集しています。募集チラシを作成し、地域のスーパーや銀行、郵便局、喫茶店、市役所、ボランティアセンター、社会福祉協議会などに趣旨を伝えて置かせてもらっています。

また、入居相談が当初ほどはないため、通勤圏となる多摩西部地域も視野に入れて広報を検討中です。

### 担当者インタビュー

## 若者支援に関わることになったきっかけ・動機

赤城 智美さん

NPO 法人アトピッ子地球の子ネットワーク 事務局長



食物アレルギーやアトピーの重症な子の中には自己肯定感が低い子もいます。アトピッ子地球の子ネットワークでは自然と触れ合う2泊3日のキャンプ形式で自分を発見するという取り組みを、26年間実施してきました。年々、参加者にも招待しているファミリーホームの子にも発達障害の子が増えてきていることや、自己肯定感の低さが災いして卒業や就職でつまづく子どもたちがいることを長年の活動で感じていて、その先の自立支援に関わりたいと思うようになりました。また、例えば食物アレルギーがあり自分で緊急時に使う注射器（エピペン）をいつも身に付けていなければならない子は、本人も緊張しているし、周りの子も気にして、文化祭の打ち上げに誘われなかったり、修学旅行にも、学校から断られて行けなかったり、普通の子ができることができないことがあります。ヘルプキットと刺繍した布製のエピペン携帯ケースをつくり、存在をアピールできたことで空港職員がアレルギーの子に気づいてサポートしてくれるようになったなどのアレルギー活動での経験から、発達障害のある子や社会的養護の経験者にも「ここにいるよ」とアピールすることで社会が手助けできるのではないかと思いました。また、キャンプにボランティアに来てくれた社会的養護出身の高校生が、コロナ禍でアルバイト先がなくなり、友達の家を転々としているときいて、なんとかしなければという思いがあって、コロナ禍にあわてて動き回るうちに、気がついたら、ステップルートを運営していた、という感じです。



Interview

## 取り組みのなかで大事にしていること

ひとり一人の体験、状況を丁寧に聞き取ることを大事にしています。極端に大人びていたり、18～19歳の子が、初対面のとき、小さな子どものようにずっとお絵描きをしていたり、好きな小物を買うのにお金を全部使ってしまったたり、また、恋愛に関してのとらえ方が感情に表れたりする様子を見ていると、その子がしてきた経験によって精神的な発達や情緒的な発達状態が違うと思うからです。その子の発達段階を丁寧に見ながら精神的・情緒的成熟度を高めるように関わることを大事にしています。





Interview

## 支援が活かされたと感じるとき

アルバイト先でステップルームで話したことがいきで、褒められたことが嬉しかったと話してくれたり、定期券を買うのに何度も失敗しながらもできたとか、外で評価されることなく、自分でできて、うれしい、と一緒に喜ぶ時、ささやかなことでも嬉しいと感じます。



Interview

## 助成金があったからこそできたこと

活動費の支援はもちろん、団体として本来すべきことだったものの、時間や専門知識の問題があってできていなかったコンプライアンスの書式を整えるための専門知識へ助成金を使えたのが良かったです。また、ステップルームの若者支援について地域に向けてチラシをつくり、配布し、地域にむけたアプローチができました。これも助成金がなかったらできなかったことです。

### NPO 法人アトピッ子地球の子ネットワーク 活動内容

1. アレルギー疾患のある人の電話・オンライン相談（週2日）
2. Web サイト「食物アレルギー危機管理情報」（食品回収事故データ）の運営
3. アレルギー疾患のある子どものためのキャンプ
4. 大規模災害発生時のアレルギー患者・災害弱者の支援活動
5. COVID-19 感染拡大時のひとり親、長期入院患者等へのアレルギー用粉ミルクと食料の支援
6. 企業と連携したアレルギー患者用食品・日用品カタログの配布
7. ケアラーバーを対象とするステップルームの運営 他